

2023年10月14日

第39回加藤周一文庫公開講読会

『続羊の歌』「一九四六年」（後半）

日本学術振興会特別研究員

立命館大学授業担当講師

猪原 透

【第8段落】

軍国主義が亡びるや、言うべくして言えなかったことを言おうという人々は東京の焼け跡のいたるところに現れ、類をもって集ろうとしていた。①私は周囲に決して「虚脱の時代」をではなく、「大きな期待の時代」を見た。②そのときはじめて、そしておそらくそのときを最後に、私は時代の機運のなかにいる自分を感じた。しかし私が多くの仲間を発見したときは、同時にまた、その仲間の中での言葉の通じ難さを発見した時でもあった。③別の言葉を話す相手とのコミュニケーションの問題について、私を意識的にしたのは、後年の欧州ではなくて、戦争直後の日本である。

①「私は周囲に決して「虚脱の時代」をではなく、「大きな期待の時代」を見た」

・「信条」章にも「戦後の虚脱状態」という文句に関する指摘がある。戦争を讃美した政治家、知識人、ジャーナリストは「虚脱状態」に陥ったかもしれないが、加藤を含めて戦争に批判的であった人々にとっては「言うべくして言えなかったことを言う」機会がようやく到来したのであり、未来への期待に溢れていた。

②「そのときはじめて、そしておそらくそのときを最後に……」

・加藤はほとんどの生涯を少数派として、「高みの見物」をする観察者として過ごしている。しかし敗戦後のみ、「時代の機運のなかにいる自分を感じた」（＝多くの仲間を発見し、また時代の機運と自身の主張が一致していると感じた）。

③「別の言葉を話す相手とのコミュニケーションの問題について……」

・多くの仲間を発見したが、まもなくその仲間との「言葉の通じ難さ」を感じるようになった。「別の言葉を話す相手」とは、同じ言葉を違った意味で用いる相手である。

○段落全体に関すること

・この段落までが同人雑誌と作家に関する話題であり、次段落から商業雑誌と編集者の話題に移る。「同人」であるにも関わらず議論が成り立たない、という状況を描くために、同人雑誌の話題を前半に集めたのだろう。

【第9段落】

①無名の青年であった私たちが同人雑誌をつくって、それぞれ言いたいことを言っていたときに、鎌倉在住の有名な小説家は、互いの私財をもち寄って、「鎌倉文庫」という出版社をつくり、月刊の文芸雑誌「人間」を発行した。②その編集長木村徳三氏が、「一九四六 文学的考察」を読み、私たち三人に、雑誌「人間」への寄稿をもとめたことがある。「はじめて書いていただくのだから、高い原稿料は出せませんがね」と木村氏はいった、「内容は自由に、何でも書きたいことを書いてもらって、結構ですよ」。私はそのときまで原稿料というものを受けとったことがなかった。私の売文業は、木村氏の好意と「人間」とによって、はじまったのである。木村氏は「文壇」という市場の裏表に精通していた。どの執筆者とどの編集者との間には売手市場が成りたち、どの執筆者とどの編集者との間には買い手市場が成りたつかということをよく心得ていた。③しかしそのこととは別に、一種の文学的理想を編集を通じて実現しようとしていたようにも思われる。④そういう理想主義は、「展望」の編集長白井吉見氏にもあり、「世界」の編集長吉野源三郎氏にもあった。⑤配給の衣食足りず、闇市が栄え、巷に「米よこせ」運動の赤旗がなびいていたとき、東京には抜くべからざる理想主義があったのである。⑥私はいくさの間の見聞を粉飾した小説「ある晴れた日に」を、雑誌「人間」に連載した。

①「無名の青年であった私たちが同人雑誌をつくって……」

・久米正雄、川端康成、小林秀雄、高見順などが蔵書をもち寄って貸本屋「鎌倉文庫」を作り、これが出版社へと発展。雑誌『人間』は久米正雄、里見弴などによる戦前の同人雑誌の名まえを継承したもの。編集長は木村徳三¹。

・加藤が『人間』に掲載した主な原稿は以下。

「信仰の世紀と七人の先駆者」(2巻7号、1947年7月)

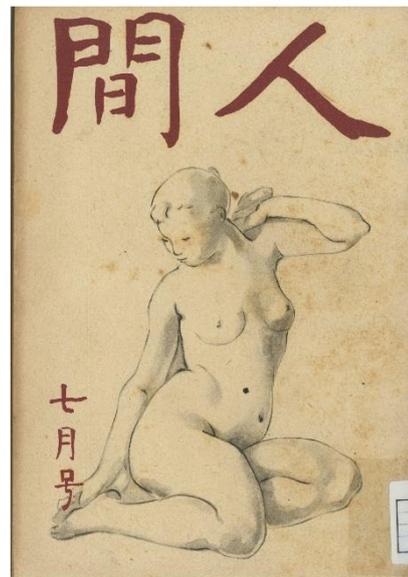
「革命の文学と文学の革命——「ユーロップ」誌の役割に就て」(2巻9号、1947年9月)

「(小説)悪夢」(『人間』別冊1、1947年12月)

②「その編集長木村徳三氏が、「一九四六 文学的考察」を読み……」

・木村徳三に加藤らを紹介したのは、中島健蔵であったらしい。木村の回想では、(書籍ではなく)『世代』の連載を読んでいる²。

・なお鎌倉文庫からは他にも、女性向け雑誌『婦人文庫』や、一般社会人向け雑誌『社会』、ヨーロッパ文学紹介雑誌『ヨーロッパ』が刊行され、加藤はそのすべてに寄稿している。



¹ 木村徳三『文芸編集者 その登音』(TBS ブリタニカ、1982年) 227頁以下。

² 同上、257頁。

③「しかしそのこととは別に……」

・『人間』は新しい日本文学を建設するため新人作家の発掘に取り組んだ(三島由紀夫など)。創刊号の編集後記は以下。

あの敗戦の晩夏に、見わたすかぎりの惨憺たる焦土を前にして、幾たびか、絶望なすところなく佇みつくさなかつたひとがあつたらうか。しかしまた、荒廢の風景に点描された菜園の鮮かな緑のいろに、涙の出るほどの感動を味ははなかつたひとがあつたらうか。〔中略〕我々はその緑の色に再建日本の表象を読みとつたのだ。そしてそれを育て燦然たらしめるこやしとしての文学の役割の重大さに烈しく思ひ及んだのである。／「人間」はあくまでこの文学の役割が十全に果されんがための最も充実せる場でありたい。³

・『人間』はまた、当時の雑誌では稀であった長編小説の連載に積極的に取り組んだ。それまでの長編小説は新聞連載による大衆文学が主流であり、それとは異なる本格的な長編小説が必要であると考えたためである。『ある晴れた日に』の連載もそうした発想による。

④「そういう理想主義は……」

・白井吉見(1905-1987)は、1946年1月創刊の『展望』(筑摩書房)の編集長。文芸評論家としても活躍した。加藤は『展望』に、「途絶えざる歌——フランスの「抵抗」と詩人たち」(38号、1949年2月)やサルトルに関する文章を寄稿している。

・吉野源三郎(1899-1981)は、1946年1月創刊の『世界』(岩波書店)の編集長。平和と民主主義を基本理念に掲げ、対日講和条約に際しては全面講和の論陣を張った。加藤は62号(1951年2月)に「龍之介と反俗精神」を寄稿しているが、本格的な寄稿は1955年以降。

⑤「配給の衣食足りず、闇市が栄え、巷に「米よこせ」運動の赤旗がなびいていたとき」

・敗戦後には食糧不足が悪化し、各地でデモが発生した。特に1946年5月19日に起った「食糧メーデー」では、労働組合や日本共産党の呼びかけで皇居前広場に25万人が集まる。

⑥「私はいくさの間の見聞を粉飾した小説「ある晴れた日に」を……」

・「ある晴れた日に」は『人間』4巻1号から4巻8号(1949年1月~8月)に連載。1950年に月曜書房から刊行された。

・末尾の文章がよく知られている。「ある晴れた日に戦争は来り、ある晴れた日に戦争は去った」。戦争がいかに「銃後」の人間関係を破壊したかを描いた。軽井沢が主要な舞台であり、「加藤自身も軽井沢に逃避した星董派ではないか」という批判への反論としても読める。



³ 同上、235頁。

○段落全体に関すること

・加藤が著述によって収入を得るようになる経緯が描かれる。「売文業」という言葉を用いて、「医業」と並ぶ「業」であることを強調。それを手引きしてくれたのが「文壇」という市場に精通する編集者であった。

・ただしその編集者も期待と理想にあふれており、これまでの段落で触れられてきた作家・詩人と同じく、敗戦直後の「戦後文学」の時代を担った人々であった。

【第10段落】

私は相変わらず医者の仕事をしていた。①相変わらず無給ではあったが、第一には、長い習慣のすでに抜き難いものとなり、第二には、医学そのものへの興味が津々として尽きず、第三には、もし経済的な必要があれば、医を業として口を糊することを期待していたからである。しかしその必要はおこらなかった。「人間」以後新聞雑誌の註文に応じて作文すれば、とにかく暮してゆくことができるようになった。②私は医を業として文筆を道楽とするのではなく、文筆を業として医を道楽とする生活をつづけることになった。

①「相変わらず無給ではあったが……」

・過去（長い習慣）、現在（医学そのものへの興味）、未来（医を業として口を糊することを期待）の順に、医者の仕事をつづけた理由を挙げる。

②「私は医を業として文筆を道楽とするのではなく……」

・「医を業として文筆を道楽」としたのは、森鷗外・木下杢太郎・斎藤茂吉である。加藤はそれと似て異なる道を辿ることになった。

・医業を廃する可能性はこの時期から念頭にあった、あるいは医業を廃して文筆業（売文業）を仕事とするようになることは自然な流れであった、ということを示そうとしている。

・ただし「医を道楽とする」とは、医学への知的好奇心が尽きなかったということでもある。

【第11段落】

①その頃の私は、欧米とくらべて日本国の著しい「後れ」を痛感することが多かった。私の専門としていた血液学分野で、戦時中の日本にはほとんど進歩がなかったが、欧米には画期的な進歩があった——ということ、私たちはすでに広島での米国の学者との接触を通じて知っていた。しかし大学の図書館には、三〇年代の末までの欧米の文献しかなく、その詳細を知ることができない。②私は中尾博士と相談し、広島で知合ったL中尉を通じて、占領軍が徴用していた築地の聖路加病院の構内へ入る特別許可証をもらった。③「許可なくして立入るものは射殺さるべし」と貼紙のしてある門のところで、武装した衛兵にその許可証をみせると、私たちは米国人の医者や看護婦が往来している病院の廊下を通して図書室へ行く事ができた。私はそこで新しい米国の医学雑誌をむさぼるように読んだ。④三〇年代の末までに主として独逸で発達した血液学は血球及び造血組織の顕微鏡形態学であった。

それは私たちが熟知していた領域である。ところがいくさの間に、輸血の研究を中心にして、従来不明の点が多かった血液の凝固機転の説明が進歩し、また血漿蛋白質の電気透析法が広く行われて、従来形態学・血清学（抗原・抗体反応の試験管内での観察）・血液成分の化学分析として、ほとんど全く独立して行われていた研究が、相互に関連するようになっていた。それは私たちにとって、新しい方法、ほとんど新しい領域の出現を意味したのである。聖路加病院の図書室で、米国の血液学の専門雑誌を見たときに、私たちの知らぬ間に日本の外では何がおこっていたか、その結果今や天下の形勢はどう変って来ているか、私たちの「後れ」はどれほど大きいかということ、実に痛烈に感じ、そのために私はほとんど「蘭学事始」の昔を思い出した。⑤もし血液学の領域で、私のしたことにくらかでも意味があったとすれば、それは、その「後れ」をとり戻そうとして戦後の貧しい研究室で渾身の力を傾けていた中尾喜久・三好和夫の二人の学者を授けたということかもしれない。冬の夜おそく大学病院の廊下を改造した研究室で、机の下の電気こんろに凍える手をあぶりながら、三好博士は、おそらく日本で最初の血漿蛋白質透析装置の一つを組み立てていた。「道具ができるまでは、臨床的研究というところまでゆかないねえ」と三好博士はいった、「こう寒くてはやりきれない」——冬でもあたたかかったのは、聖路加病院の図書室だけであった。

①「その頃の私は、欧米とくらべて日本国の著しい「後れ」を痛感することが多かった」
・本段落から日本の「後れ」に関して加藤が考えたことが論じられている。その冒頭で、まず抽象的（一般的）命題として「日本国の著しい「後れ」」に言及し、以降、具体的な事例として血液学における「後れ」を取り上げる。

②「私は中尾博士と相談し……」

- ・中尾喜久博士、I（ロッジ）中尉についても前章を参照。
- ・聖路加病院（聖路加国際病院）は、1901年に米国聖公会の宣教師によって設立された病院。敗戦の翌月、「東京で一番立派な病院」であるという理由で米軍に接收され、「米国陸軍第42病院」となる。

③「「許可なくして立入るものは射殺さるべし」と……」

- ・初出時は「許可なくして立ち入る者は射殺さることあるべし」。表現を強めている。
- ・わざわざ「武装した衛兵」に言及しているのは、血液学の「後れ」をとり戻そうとする加藤らの努力も、占領軍との支配・被支配関係のなかで行われたことを強調するため。

写真：1949年の聖路加国際病院。⁴



⁴ 『聖路加国際病院八十年史』（聖路加国際病院、1982年）。

④「三〇年代の末までに主として独逸で発達した血液学は……」

・血液学の最前線が、それまでの「独逸」からアメリカに移行したことを示す。
・新しい血液学の内容をやや詳しく、従来は「ほとんど全く独立して行われていた研究が、相互に関連するように」なったことを説明している。次の段落では、フランスでは文学とファシズムへの抵抗が相互に連環したことが論じられている。

⑤「もし血液学の領域で、私のしたことにくらかでも意味があったとすれば……」

・その成果が、1949年1月から5月にかけて「血液学の進歩（1941-1948）」を連載（三好和夫との共著、『日本臨床』）である。
・加藤は後年、西洋医学を紹介した森鷗外、紹介された新しい方法によって学問的研究を行った木下杢太郎、実地の医療に従事した斎藤茂吉の3人を取り上げ、自らは「小さな鷗外的役割」を果たしたと述べている。「文学にも医学とパラレルな面がある。鷗外も、はじめは翻訳——つまり紹介を行った。いっぼう、第二次大戦後、ゴットフリート・ベンについて書いたのは、誰よりも私が早かった（笑）。医学と文学の関係も、それぞれ両者の幸福な結婚であったかという、そうではない。これは私の生涯の私的な問題のひとつでもある」⁵

【第12段落】

①しかし私が日本国の「後れ」を感じていたのは、血液学の領域においてだけではない。日本では作家たちの多くが、軍国主義権力に迎合し「ファシズム」を賛美して、文学をともどもなく荒廃させていったときに、フランスでは多くの詩人が、ドイツ国家社会主義の権力に抵抗し、「ファシズム」を弾劾し、人間の自由と品位とを主張することにより、文学に新しい生命を吹きこもうとしていた。戦前沈黙していた詩人が、俄かに活気を取り戻し、戦前知られていなかった新しい作家が競い興る未曾有の壮観を、②私は日仏会館の書籍展覧会で知った。日本の文学者の精神的な「後れ」は、否定することができなかった。もちろん「ファシズム」に抵抗する文学を、日本の文学者がつくり出さず、フランスの文学者がつくり出したのは、③そもそも日本の文学者の周囲に、反「ファシズム」の国民感情がなく、フランスの文学者の周囲に、それがあったからであろう。それならば、④彼我の文学者のちがいは、また、「臣民」と「国民」のちがい、「教育勅語」と「人権宣言」のちがい、デカルトの精神と神ながらの道とのちがい、つまるところ「前近代」と「近代」とのちがいでもあるはずだろうと私は考えた。⑤この考えは、ペタン政府が外国の傀儡政権であったのに対し、東条政府が外国の傀儡ではなかったということを、ほとんど無視していたという点で、事態を単純化していたし、ろくに知りもしない「フランスの国民感情」を前提としていたという点で、不正確なものであった。

⁵ 「著訳者インタビュー 知的・芸術的自叙伝「鷗外・茂吉・杢太郎」『月刊百科』1997年8月号、64頁。

① 「しかし私が日本国の「後れ」を感じていたのは……」

・「しかし～だけではない」は加藤がしばしば用いるフレーズ。ここでは日本の「後れ」が血液学（知的方面）だけではなく、ファシズムへの抵抗に見られる精神的方面にも見られることに注意を促している。

・日本もフランスも、戦時下においてナショナリズムの高揚が見られた点、そしてナショナリズムを背景とした文学が作られた点では共通している。しかし、日本ではナショナリズムがファシズムと結びついたのに対し、フランスではナショナリズムが反ファシズム＝「人間の自由と品位」と結びつき、詩人はそれを詩作のエネルギーにするという違いが存在したという。



② 「私は日仏会館の書籍展覧会で知った」

・1947年7月、戦中・戦後にかけて出版された、フランス文学の書籍が展示された。加藤はこの展覧会の模様を報じており、装丁の美しさや詩・小説の多さに「戦争は文学をパンフレタ化しなかつたという事実」を読みとっている⁶。

③ 「そもそも日本の文学者の周囲に……」

・加藤は「抵抗」の詩人の代表的人物としてアラゴンの詩を論じるなかで、二つのことを強調している⁷。ひとつは、アラゴンが（読者の限定された）ダダ・シュールレアリスムを乗り越えて、平易な言葉で「国民的感情を直接にうたった」こと。もうひとつは、「フランスの詩の伝統のなかに身をおき、詩作の厳密な方法をわがものとした」ことである。

⇒ 自己を制約する政治的・歴史的状況を意識化し、それを「理性」によって支配することで制約を制約と感じないのが、加藤の見た「抵抗」の詩人。

④ 「彼我の文学者のちがいは……」

・日本のフランスに対する精神的な「後れ」は、「臣民」と「国民」の違い（権威への服従と自主独立の違い）、「教育勅語」と「人権宣言」の違い（「家」制度と個人主義の違い）、「神ながらの道」と「デカルトの精神」の違い（精神主義と合理主義の違い）として現れている。

・この違いは「前近代」と「近代」の違いでもある（＝前者から後者へと進まねばならない）。加藤が歴史の進歩についてどのように考えていたかは、「信条」章9段落を参照。

⑤ 「この考えは……」

・『続羊の歌』執筆時点での評価。「信条」章第11段落でも、西洋の「実際」ではなく、「書物にあらわれた西洋人の理想」を通して想像していたと述べている。

⁶ 加藤周一「現代フランス書籍展の印象」『文化タイムス』1947年8月11日号。

⁷ 加藤周一『抵抗の文学』（岩波新書、1951年）。

【第13段落】

①あるとき中村真一郎と私が鎌倉の竹山道雄教授を訪ね、談たまたま大衆の水準での日本の「後れ」に及んだとき、慧眼な竹山教授は私の議論のそういう弱点をたちまち見破った。鎌倉の竹山家の窓外には、松林が海の風に鳴っていた。着流しの竹山教授は、悠々と煙草をくゆらしながら、青年客気の説を聞くところまで聞いたあとで、こういった、②「しかし大衆はどこでも同じものですよ、馬鹿な宣伝にだまされるほど馬鹿なものです、ぼくはそれをドイツでいやというほど見てきたのだ、決して日本にかぎったことではない……」。そのとき私は歐洲を見たことさえなく、彼らの言葉で話をしたことさえもなかった。本はいくらか読んでいたけれども、相手は少くとも十倍を読み、十倍を知っていた。③私は決して説得されなかったが、竹山説を反駁することはできなかった。大衆はどこでも同じものであるのだろうか。——④その後みずから歐洲で暮らすに及んで、私は大いに、竹山説に近づいた。と同時に、また竹山説の弱点をもはっきりと見抜くことができるようになった。「日本の後れ」がなかったのではない、私がそれを誇張していたのである。

①「あるとき中村真一郎と私が鎌倉の竹山道雄教授を訪ね」

・竹山道雄（1903-1984）は『ビルマの豎琴』（1948年刊）で知られる小説家・ドイツ文学者・第一高等学校教授。1927年から3年間のドイツ留学経験を持つ。1940年のナチス全盛期に「独逸・あたらしき中世？」（『思想』215号）を發表して批判した自由主義者。

・中村真一郎の回想では、竹山の友人である神西清（1903-1957）に連れられて訪問したことが交流が生まれるきっかけであったらしい。「竹山さんの戦時中の体験に根差す、悲観主義的なファツシズム批判は、観念的な議論の横行した戦争直後の論壇に異彩を放っていた」⁸

写真：竹山道雄（1957年）⁹



②「しかし大衆はどこでも同じものですよ……」

・日本の「後れ」が果たして存在するのか、という疑問。次の段落では、日本の「後れ」をとり戻すための根本的な変化が生じる可能性はあるのか、という疑問が取り上げられており、加藤の考えに対して二つの方向から疑問が向けられたかたちとなっている。

③「私は決して説得されなかったが……」

・この時期では、血液学では「臨床的研究」まで進まなかったし、フランス文学・フランス文化の理解においても現実の歐洲を觀察するところまではいかなかった。しかし、自らの議論の弱点を自覚し、のちに留学へと赴く動機となったことが示唆される。

⁸ 中村真一郎『戦後文学の回想』（筑摩書房、1963年）48頁。

⁹ 『新撰現代日本文学全集』34巻（筑摩書房、1959年）。

④「その後みずから欧州で暮らすに及んで……」

・欧州を実際に見ることで、欧州＝抵抗という単純な図式は崩れた。ただしそれは同時に、それまで欧州と対照させて解釈してきた日本を、改めて検討の対象とする契機となった。

【第14段落】

「抵抗」の文学との接触は、日本の「後れ」への私の関心を強めたばかりでなく、また私自身のフランス文学理解の「後れ」をも自覚させずにはいなかった。①たとえばフランソワ・モリヤックの著作の大部分を私はかねて読みつくしていたけれども、その読み方から、このカトリックの作家が他日共産主義者と手を組んで「抵抗」の作家組織に投じるだろうとは、想像することもできなかった。②またルイ・アラゴンやドリュ・ラ・ロシエルの著作を全く知らなかったわけではなかったが、占領下のフランスでアラゴンの書いた実に美しい詩の由来や、独軍と「協力」してフランスの解放と共に自殺したドリュ・ラ・ロシエルの行動の動機を、それぞれの作家について私がもっていた像から理解することは困難であった。すなわち私の読み方、私のフランス文学者の像に何かが欠けていたことは、あきらかであった。③また戦後俄かに現れて一世を風靡しようとしていたジャン・ポール・サルトルやアルベール・カミュの文学が、それまでの文学の概念からはみ出していて、読み方を変えなければ、核心をつかみ難かったということもある。私は知的訓練における日本の「後れ」を感じた。④小説作法の技巧上の問題よりも、より根本的な問題から出直す必要があった。しかし私は若く、出来ないことはないような気がしていたし、仕事をするまえに道具をそろえる時間は充分にあると考えていた。日本の「後れ」、またそれ以上に私自身の「後れ」を、正当化する代りに、とり戻すための努力をする時代が、無限の将来に向って開かれているはずであった。⑤「ほんとうに日本と日本人は変わったのでしょうか」といっていたのは、そのとき、渡辺一夫先生だけであった。私たちの何人かが集まって、海外の新思潮や世直しの理想を語っていたときに——思えば明治以来、いや、おそらく遣唐使以来、その二つはわが国では離れ難く結びついていたのだ——「ちょっと音楽をきいてみませんか」と渡辺先生はいった。⑥その蓄音機から流れ出す歌は、途方もなく高く鳴り響いた、「勝つて来るぞと勇ましく、誓って国を出たからは……」——「こういう歌をときどき聞いた方がよくはありませんか、想い出のよすがに……」。⑦たしかに戦後二〇年を通じて、その歌は私の耳の底にも鳴りつづいていた。しかしその歌が聞こえないほど大きな声で怒鳴ることの必要なときもあったのである。

①「たとえばフランソワ・モリヤックの著作の大部分を……」

・フランソワ・モリヤック François Mauriac (1885-1970) はカトリック作家。第二次大戦中には反ナチスの抵抗運動に参加。加藤は1930年代末から40年代初めにかけてフランス語を自習し、モリヤックを読んでいる¹⁰。

¹⁰ 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」『「羊の歌」余聞』(筑摩書房、2011年、初

②「またルイ・アラゴンやドリュ・ラ・ロシエルの著作を……」

・ルイ・アラゴン Louis Aragon (1897-1982) については先述した通り。明言はされていないが、仏文研究室が購読していた雑誌を通して名前を知ったとみられる。ただし雑誌の講読は1930年代半ばまでで中止された(加藤が読んだのは1940年前後)。

・ドリュ・ラ・ロシエル Pierre Eugène Drieu La Rochelle (1893-1945) は対独協力者となった詩人・小説家。『抵抗の文学』ではサルトルに依拠して彼の対独協力を、「自己の情念に対する彼自身の弱さ」への憎悪が、自己を生み出した「頹廢した一社会」への憎悪に転じたことの帰結として説明している¹¹。これも仏文研究室が購読していた雑誌を通して名前を知ったとみられる。

・仏文研究室が購読していた『Europe』や『N・R・F』で執筆していた作家たちのことは戦前から知っていたが、他にどのような作家がフランスで活動しているのか、彼らはどのような知的環境のもとで活動しているのかについては、ほとんど知らなかった。

③「また戦後俄かに現れて一世を風靡しようとしていた……」

・ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre (1905-1980) やアルベール・カミュ Albert Camus (1913-1960) について辞書的な紹介は省略する。両者とも『抵抗の文学』のなかで、戦時下のフランスに登場した新しい文学者の代表的人物として取り上げられている。

・敗戦後まもない時期から、日本でサルトルは熱心に読まれた¹²。その背景として加藤は以下の3点を指摘する。「実存主義は死と向き合った人間の哲学である」こと、「サルトルの実存主義は無神論である」こと(=「天皇制超国家主義」に対する反動)、「サルトルは戦後のフランスに戦前の体制の復活を望まなかった代表的知識人の一人である」こと¹³。加藤自身もサルトルには1947年ごろから注目している。

・1950年の文章では、プルーストに至る小説の歴史を「心理分析」の発展過程として捉え、その基礎に「近代の個人主義」「市民的人間観」の存在を指摘(=複雑な心理を単純な要素へ、社会を個人の集合へと還元する発想)。サルトルの小説(『自由への道』)は、こうした「分析の精神」を否定し、現実の「総合的な捉え方」に基づく新たな小説を目指しているとしているという。

⇒ 「個人の問題が社会の問題と常に交わらずにはいないところに、現代という時代のシチュエーションがある」のであり、サルトルは(政治的事件の描写によってではなく)小市民的生活の枠内にとどまるか、外に出るかの二者択一を迫られる主人公を通して描いたという¹⁴。

出1981年)83頁。

¹¹ 加藤周一『抵抗の文学』(岩波新書、1951年)30頁。

¹² 『一九四六 文学的考察』でも福永武彦がサルトルを論じている。

¹³ 加藤周一「命短し」『夕陽妄語』2(筑摩書房、2016年、初出1993年)74頁。

¹⁴ 加藤周一「ジャン・ポール・サルトル」『加藤周一自選集』1(岩波書店、2009年、初

④「小説作法の技巧上の問題よりも、より根本的な問題から出直す必要があった」

・「根本的な問題」とはつまり、「文学とは何か」「文学の概念をどのように定義するか」という問題である。1950年には『文学とは何か』を刊行し（サルトルに同名の著作がある）、早くもこの問題に取り組み始める。

・留学を経て確立される加藤の文学概念は「大陸型文学概念」であり、文学は広義に理解され、「文体、または散文の質」によって定義される（＝よいフランス語で書かれた文章はジャンルを問わずフランス文学である）¹⁵。ただしその文学概念は単に過去の文学史から導きだされるのではなく、「今日の状況を分析し、叙述し、殊に文学を創るためにも、定義されなければならない」という¹⁶。

⇒ 現代の状況は、一方には「現実の全体化」（＝先進工業国による「第三地域」の軍事的・政治的・経済的・文化的支配）が存在し、他方には「現実の細分化」（＝知識の細分化、現実の全体を見通すことが困難な状況）が存在する。文学概念を広義に理解することで、「現実の細分化」を拒絶し、文学を「現実の全体を扱う事業」としなければならない。

例) 野間宏、金芝河、そしてサルトル。

もしこのように〔広義に〕文学を定義すれば、たとえばサルトル氏の著作の全体は、まさにそれが文学であるという理由そのものによって偉大だということになるだろう。彼は常に具体的・特殊な状況を通して、世界の普遍的な構造をみようとしていた。あるいはあたえられた条件の特殊性を、全体としての現実の普遍性へ向って超えようとする精神のはたらきの裡に、人間の自由をみようとしていた。¹⁷

⑤「「ほんとうに日本と日本人は変わったのでしょうか」といっていたのは……」

・1945年8月15日を境に言論界の風潮は、「鬼畜米英」「一億玉砕」から「平和と民主主義」へと一変した。しかし、戦争を生み出した日本社会の構造、日本人のものの考え方が本当に変わったのかについて、渡辺一夫（1901-1975）は懐疑的であり、それゆえに過去を直視する必要があると考えていた。

・『私にとっての20世紀』では、このときをふり返って以下のように述べている。

私はもう少し希望をもっていたから、先生の懐疑はちょっと行き過ぎではないか、やや見方が悲観的すぎるのではないかと考えていました。少なくとも根本的に変わる可能性があるのでないかと考えていた。¹⁸

出1950年)。加藤自身の西洋留学体験をモデルとした『運命』(1956年)も、主人公の帰国するか／フランスに留まるかの選択を通して大きな問題(日本と西洋の関係)を描く。

¹⁵ 加藤周一「文学の擁護」『加藤周一セレクション1』(平凡社1999年、初出1976年)。

¹⁶ 同上、179頁。

¹⁷ 同上、208頁。

¹⁸ 加藤周一『私にとっての20世紀』(岩波現代文庫、2009年)53頁。

⑥「その蓄音機から流れ出す歌は……」

・蓄音機から流れ出したのは、当時の代表的な軍歌である『露營の歌』。これと『討匪行』などは戦後も多くの人が記憶し、口をついて出ることも多かった。

・軍歌が「途方もなく高く鳴り響いた」のは、それが象徴する戦時下の日本人のものの考え方が、「海外の新思潮や世直しの理想」を語る声をかき消す程に強いものであることを示すため。「思い出のよすがに」という渡辺の言葉もむろん皮肉であり、実際は日本人のものの考え方が戦前から変わっていないことを示唆している。

⑦「たしかに戦後二〇年を通じて……」

・渡辺の懐疑的見通しは、時間の経過とともに説得力を増していった、という『続羊の歌』執筆時点での評価。しかし当時の加藤の言論活動が無価値であったというわけではない。

・加藤はのちに『一九四六 文学的考察』を「怒りの抒情詩」と位置づけている¹⁹。戦争を起こした政治指導者への怒り、集团的狂気に陥った日本国民への怒りを表明することは、加藤自身のためにも必要であったという。

・また、「星董派」のように戦争と軍国主義への批判に役立たない知識のあり方は信用ならない、という確信は戦後の加藤の出発点となった。

¹⁹ 加藤周一「追記」『加藤周一著作集』8巻（平凡社、1979年）86頁。